

コンラッドの『台風』について

秋葉 敏夫

前稿の「コンラッドと海と『青春』」のなかで、ジョウゼフ・コンラッドと海とのかかわりあい、および彼のいわゆる海の物語の性格について、簡単に述べておいた。それを大ざっぱに要約することから、はじめてゆきたい。

コンラッドは16才のとき、祖国ポーランドを離れて、船乗りになるが、その動機はけっして明確ではない。ロマンチックな少年の、たんなる海への憧れ、好奇心や冒険心も、その一部だろうと考えられる。だが、海に対する甘い幻想は、彼がやがて、海の厳しい、残酷なすがたとぶつかることで、たやすく崩壊する。そして、コンラッドと海とのかかわりあいは、たぶん、その危険な海を相手とした、行動的で倫理的な、闘いのかたちをとる。彼にとって、海はただ、人間の生命を奪う、冷酷な、巨大なもの、というのではない。むしろ逆に、海がそういう性格を秘めているからこそ、それは、彼の注目する、船を操る精神や態度を、人間の意志や気力、あるいは本能というべきものを、鍛え、育てる力となる。だから、彼の求める船は、とうぜん、人間のばく大な労苦を要求する、帆船である。彼がいつも、ただすぐれた性能で走る、機械化された巨大な蒸汽船を嫌うのは、海のこの創造的作用を、彼が重視するからである。

コンラッドの海の物語は、そのほとんどが、多かれ少なかれ、彼自身の体験にもとづいている。作品は、ひとつの航海、ひとつの出来事が中心となり、どれも、短、中編であって、比較的長いものも、主題や物語の整理統一から、いわば、短編の範ちゅうに属している。舞台は海に囲まれた船上で、周囲から隔離された、ひとつの実験室に等しく、描かれるのは、船という共同社会が背景の、さまざまな人間関係である。作家のおもな関心は、死や危機によってもたらされる、船乗りの行動とその心のうごめき、

海による試練であって、それはたぶん、ゆたかな象徴性をおびてくる。そして、この象徴が成功をおさめるとき、作品はたんなる海の男の世界にしばられない、広い意味あいをもつこととなる。コンラッドの海の物語は、そのよしあしは別として、どれも、ほぼ20年におよぶ海上生活の結晶というべき、自己の信念の、端的な表現である。

『台風』(*Typhoon*, 1902) について考えるとき、前置きとしては、おそらく、この程度で充分だろう。コンラッドの場合、1902年というと、すでに、彼の骨組を形づくるような作品、『闇の奥』(*Heart of Darkness*, 1899)、『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900) が出版されている。そしてその時期は、彼がいくつかの短、中編を世に送り、次の大作、『ノストローム』(*Nostromo*, 1904) を書き出すこととなる、作家として非常に充実していたところである。『台風』は、およそ30,000語ほどの中編だが、彼にしては比較的早く、4か月弱で完成されている。物語の素材は、例によって、彼が耳にした、実際にあった出来事で、作家のこぼを使えば、「でも、結局、それはあてにならない、ただの海の話にすぎなかった⁽¹⁾」という。だが、細部の肉付けは、意識的な創造と関係なく、体験の蓄積から自然に浮かんできたものらしいし、作品の中核は、やはり、そういう力にささえられた、みごとな迫真性と説得力ある信念だろう。

『台風』は、いわゆるコンラッドの海の物語では、『ナーシサス号の黒人』(*The Nigger of the 'Narcissus'*, 1897)、「青春」(*'Youth'*, 1898) に続く、3番目のものである。最初1902年に雑誌に発表され、それ以来、これはかなり好意的に迎えられている。それというのも、物語の大部を占める、あらしの精細な描写は、彼の独壇場で、『ナーシサス号の黒人』のにけって劣らないし、現在彼を偉大な作家にしている問題意識に弱くとも、物語の展開と主題の表白との点で、この作品がすぐれたまとまりをみせているからである。それにまた、よかれあしかれ、作家の本質に触れる側面をいくつか、この中編が、端的に示しているからでもあろう。アンドレ・

ジッド(1869~1951)にコンラッドの存在を教えたのは、ポール・クロードル(1868~1955)だが、だれかが彼のなにを読むべきかとたずねたとき、クロードルは全部と答え、『ナーシサス号の黒人』、『青春』、『ロード・ジム』といっしょに、『台風』の名をあげているのは、よく知られた話である。⁽²⁾ジッドはこれらの作品名を書きとめ、読むとすぐ、そのとりこになったという。この挿話は、まだそれらのフランス語訳などのない、『台風』の発表された、およそ数年あとのことらしい。

ここで、物語を簡単にまとめておきたい。舞台となる、ナン・シャン号は、帆船ではなくて、小さいが荒天には適した造りと評判の、汽船である。船長マックワーは、想像力に欠ける、鈍重な男で、めだつた取柄もなければ、いままで、これという失敗もせずにやってきた、そんなたぐいの、地味な、静かな人間である。おとなしい、事実を尊ぶだけの、船長の性格は、機関長ラウト氏や一等航海士ジュークスなどから、嘲笑的に扱われ、なんども言及されるが、それが物語のたくみなアイロニーとなっている。こんどの航海では、ナン・シャン号は、数年間の出かせぎでためた財産を、おのおの大事にかかえる、200人の中国人苦力クーラーを乗せている。船は晴天のシナ海を、順調に北上してきたが、やがて気圧ががくんとさがり、あらしの気配となる。強い風雨と打ち寄せる大波に、船の動揺は激しくなるものの、乗客を楽にするため針路を変えたらということばに、船長は耳を借すことなく、そのまま、台風のなかを突破しようとする。こうして、船はあらしとぶつかり、その長い闘いに、手ひどい打撃を受け、もはや浮かんでいるのが精一杯となる。そんなとき、船艙に閉じ込められた苦力たちの、悲惨な、騒然たる状況が報告される。つまり、彼らは狭い部屋のなかで、船が大きく揺れるたびに、いわば人間の塊りとなって、左右にのたうっているという。しかも、転がり出た銀貨を捕えようと、彼らは激しく相争い、手のつけられぬけんかの最中だ。実状はたしかにその通りだが、風雨と怒とも、いまが盛りなのである。だが、責任感の強い船長の命令で、ジュー

クスは他の船乗りと、その混乱を鎮めに、船艙へ飛び込み、彼らの恐怖と疲労に助けられて、なんとか、騒動をとりおさめる。そして、船は台風の眼に入り、風は凧ぐが、問題は、集められた銀貨をどのようにして正しく返すか、ということである。ナン・シャン号は、次のあらしの襲来にもちこたえ、どうやら、難破船さながら、目的港にたどりつく。マックワー船長は、結局、どうされるかわからない当局の力にまかせるよりは、同じ土地での同じ期間の働らきという点に注意し、集めたお金を均等に配分することで、事態に終止符をうつ。一等航海士ジュークスは、友人あての手紙で、次のように書いた、「このまえ、船長が思い出しているんだ、『本にあることだけがすべてじゃないんだよ』とね。あんな鈍い男にしては、とてもうまく切り抜けたと思うよ⁽³⁾」と。

海の物語というのは、限られた自然現象と船が舞台という制約のため、ややもすると、マンネリ化の傾向を示す きれいがあるかもしれない。じっさい、作品間には、似たようなパターンが多く見られるし、作品の幅は比較的狭いといっても、それほど大きな間違いではないだろう。コンラッドの場合も、おそらく、その例外となるわけではない。物語はどれも、多かれ少なかれ、船外や船内の敵との闘いに終始するし、それらから、類似したパターンを見つけるのは、ごく簡単なことである。しかしながら、そうはいっても、その闘いに込められた意味とそれを取り巻く人びとの思考の相異によって、作品がそれぞれ、微妙に異なったものになるというのも、また否定できないだろう。そのうえ、彼のたくみな象徴の使用が、たぶん、作品の幅の狭さを救うことにもなる。『台風』はたんなる悪天候の航海記でなく、その主題は、いわば、危機に際する臨機応変の処理であり、凡人にも存する偉大な力と才能の発見だろう。物語はいくつかの視点と全知の立場からすすめられるが、その流れは、おおよそ、まだ経験は乏しくとも、想像力ゆたかで成長の可能性を秘める、若い一等航海士ジュークスの方に向かっている。

コンラッドの問題意識をひとことでまとめるとすれば、あっさり、闇との闘いとでもいえるだろうか。それをまた、いわゆるコンラッド流の人間の条件、社会的条件との闘い、といいなおしてもよい。つまり、そこで意味するのは、人間を取り巻く世界が概して危険なものとしか映らない、作家の闘いと防衛の姿勢であって、それらはたぶん、悪というべき人間精神の奥底の暗黒とか、人間の生をおしつぶす、政治の破壊性や不条理性性に対する、彼の不安な凝視として、その鋭い認識として表現されるだろう。それに技法的には、いわばそういうものを象徴する、どす黒い雲が、彼の作品ではしばしば、安らぎの期待できない人間世界を、おおうことになる。『台風』でも、そのおもな場面は、暗黒のなか、疾風、怒とう、暗雲のなかで、すすめられてゆく。ところが、船という共同社会の存続、その秩序の維持への指向といった意識が、作品の底流に流れているとは思われるものの、船上の出来事から触発される、その暗黒の意味は、かなり小さなものである。そこには、人間の悪とか政治的な面は、ほとんど含まれてこない。作品としてのまとまりにもかかわらず、いわば、その主題が作家の中心的な意識と離れている、というのが、おそらく、『台風』の弱さであり、この中編の軽さだろう。コンラッドは全知の立場から、あらしの倫理的な性格を、次のように説明している。

とつぜん神が怒りの水がめを投げつけたように、ほんもののあらしは、ふいに攻撃する、おそろしいものだった。まるで巨大なダムが、風上に向けて爆破されたかのごとく、それはあたり一面で大きく裂し、船はものすごい衝撃と突進する奔流とにおそわれた。たちまち、人びとはたがいの接触を失なった。これこそ、激しい風の秘める、解体力である。ひとのむすびつきを切り離すのだ。地震、地すべり、なだれは、いわば激情なしに、とつぜん人間におそいかかる。だが、狂暴なあらしは、まるで復讐をとげるかのように、ひとをおそい、手足を押さえようとし、心に

ねらいをつけて、精神そのものまでたたき出そうとするのだ。⁽⁴⁾

あらしの襲来によって、『台風』の船乗りたちは、いらいらし、愚痴が多くなる。そして、彼らに必要な連帯感が失なわれはじめ、船上の秩序が崩れかける。彼らはまさに、あらしの解体力に敗れそうだが、ナン・シャン号は性能のよい汽船であって、彼らは少なくとも、そのどう猛、危険な相手と闘っているのである。だが、それがどんなにつらくとも、作家の眼には、この闘いが回避すべきものとは、けっして、映っていない。つまり、それは、例によって、人びとの勇気や忍耐力や意志をためす、ひとつの試練であり、感受性ゆたかな人間にとっては、いわば、創造的な闘いだからである。『台風』のあらしはたんなる自然現象で、背後に秘める象徴性に乏しいものの、その描出には、人びとがこういう闘いを乗り越えることで、徐々に、一人前の船乗りとなり、一人前の人間になってゆく、そんな希望が隠れている。

コンラッドのひとつの特徴は、ある出来事、あるいは人物を介して得られる、人間の精神的発展を扱うことにあるだろう。作品によってその見方のあてはまらない場合もあるが、『台風』はそうした発展、またはそうした可能性を扱った作品と、充分、みなすことができる。その意味では、物語の中心人物は、マックワー船長というより、一等航海士ジュークスと比べてよく、現実の外画描写が多いなかで、彼らの内的交渉は注目し値するところである。たとえば、作家の豊富な体験から、その姿が自然に浮かんできたという、マックワー船長は、あらしと闘い、それを乗り切る心がまえを、次のように述べる。おそらく、そこには、作家の理想にちがいない、行動に生きる男の、断固たる意志と信念とがあるだろう。それにまた、その気迫に押されながら、船長のことばを聞いてうなずく、若い一等航海士ジュークスの姿を、見落としてはいけないだろう。

ふたりとも、相手の眼には、はっきりしなくなってきた。

「まず、船がこのあらしを突破して、向こう側に出るのを信じるんだ。明々白々なことだよ。これには、ウィルソン船長の台風戦術なんか、少しも考えられないよ」

「そうですね、船長」

「また何時間も、悪戦苦闘ということになるな」船長がつぶやいた。

「もう、甲板には、とられるものはあんまりないけどね——君かわたしのほかには」

「そのときはいっしょですよ、船長」ジュークスは、かたずをのんで、そっとささやいた……………。

「どんなことにも、気おくれしちゃだめだ」まえより早口で、船長がもぐもぐ続けた。「船はいつも風上に向けておく。なにいわれても、かまうんじゃない。もっともひどい荒波は、きまって、風といっしょにくるものだ。それに立ち向かう——いつもそれに立ち向かう——突破の方法はそれだよ。君は若い船乗りじゃないか。立ち向かうんだ。どんな人間だって、それで充分だよ。冷静さを忘れないでな」

「はいっ、船長」心に動くものを感じながら、ジュークスは答えた。⁽⁵⁾

マックワー船長と一等航海士ジュークスとの関係は、ただ、この場面に限られるわけではない。『台風』には、あらしとの闘いのほかに、もうひとつ、苦力の問題が描かれている。そして、作品の素材となった出来事について、作家自身、「わたしたちにとって、その興味は、もちろん、悪天候ではなくて、異例の緊急時に、船内の人間的要素から生まれた、船の生存にからむ異常な紛糾事態⁽⁶⁾だった」と述べるように、『台風』の中心は、むしろ、苦力たちの思いがけない騒ぎにある、といえるだろう。物語は、いかにも申編らしく、わき道にほとんどそれないで、このクライマックスに向けて、たくみにすすめられてゆくのである。つまり、あらしとの遭遇は、

ひとつの緊迫した状況であり、それとの闘いの心がまえは、苦力問題の解決策にも、少なからず、あてはまるものである。それに、繰り返えされる船長の鈍重さや平凡さ、書物の知識より体験尊重への傾斜は、主題を浮き上がらせるための用意と考えることができる。ただ、苦力事件の結末は、ややあっさり、事後報告的に行われるが、これについて語るジュークスの手紙は、また、作品の核心でもあろう。そして、彼の眼でとらえられる、船長マックワールの姿——がんこに自己の主張を押し通し、意外にも適切な処理をした男——と、その良心的な責任感を賛嘆し、「あんな鈍い男にしては、とてもうまく切り抜けたと思うよ」という、ジュークスの判断は、やはり、注意しなければならない。苦力騒動も、たしかに、ひとつの試練であって、マックワー船長の存在は、ジュークスにとり、いわば、その精神的開眼、あるいは発展の、ひとつの手段に近いものといえるだろう。

こうした船長とジュークスとの関係をのぞくと、『台風』で描かれる人間関係は、まったく、表面的なものである。なにしろ、登場人物は、数はわりに多いのだが、あいまいな、影のある人間は見えないし、ゆたかな感受性と思考を示す人間が、ジュークス以外、まずいない。そのことは、内容的に、この作品を比較的軽いものにしており、たとえばロレンス・グレイヴァーは、「『台風』をとて忘れられなくしているのは、扱う問題、あるいは主題というより、むしろ、文体と物語の方法のせいである⁽⁷⁾」と書いている。じっさい、彼の見解は穏当であって、作家自身も、この中編に、なにか大きなことを、狙ったわけではないらしい。『台風』執筆中、コンラッドが述懐していることは、「もっとも単純な考えをはっきり表明するのは、やってみると、非常に難しいものです⁽⁸⁾」は、そのことを端的に示してくれているだろう。技法に関する考察は、別の機会にゆずらなければならないが、ただ、マックワー船長の全体像を作り上げるため、アイロニーの適度の繰り返しと多角的な視点の援用が、効果をあげている事実だけは、ここに明記しておきたい。それに、あらしの眼から出るときの、もうひとつの闘

いの省略や、苦力騒動のてんまつが間接的に、ややあっさりなされていることが、読者の想像力を駆り立て、作品との関係を密にさせるという点で、たくみなやり方だと思われることを、付け加えてもよいだろうか。

じっさい、評家のなかで安易に片づける人もいるように、『台風』がまさしく単純素朴、内容的に軽いというのは、少しも否定できない。だが、それによって、この中編のもつ、作家の本質に触れる部分が、変わるわけではない。この作品にも、「青春」と同じように、海に対するコンラッドの姿勢や、彼のいわゆる海の物語の性格が、明確に出ている。そのうえ、船長を扱う人間観には、他の作品で見られる、エリート像の弱さ、文明人の残虐さ、野蛮人の自制心や高貴さ、などという意識と、相通じるものがある。「青春」が、もし彼の海の物語群の序なら、これはそれにすぐ続くものだろうし、一等航海士ジュークスの描出は、のちの作品の、若い船長を思わせるだろう。『台風』は、なるほど、複雑な思考のない中編で、その限界ははっきりしている。だが、そうはいっても、この中編は、たしかに、コンラッドとしては、創作上の緊張が保たれ、主題の提出と物語の展開に破たんのない、均整のよくとれた作品であろう。

NOTES

- (1) Joseph Conrad: *Typhoon and Other Stories*, J. M. Dent and Sons, 1964, p. vi.
- (2) R. W. Stallman (ed.): *The Art of Joseph Conrad, A Critical Symposium*, Michigan State University Press, 1965, p. 3.
- (3) Joseph Conrad: op. cit., p. 102.
- (4) Ibid., p. 40.
- (5) Ibid., pp. 88—89.
- (6) Ibid., p. v.
- (7) Lawrence Graver: *Conrad's Short Fiction*, University of California Press, 1971, p. 95.
- (8) William Blackburn (ed.): *Joseph Conrad, Letters to William Blackwood and David S. Meldrum*, Duke University Press, 1958, pp. 115—116.